

# 日本銀行本店 〔建物編〕

子供の頃に訪れた場所を大人になって再訪すると、かつてとは全く違う印象を覚えることがあります。興味を感じるポイントも違います。ならば社会見学にも大人ならではの楽しみ方があるはず。建物が歴史的文化財でもある日本銀行本店の見学ツアーにご案内致します。



日本銀行本店本館は重要文化財に指定された建物だが、正面に立つても道路からは横に広がる壁が見えるばかり。いかめしい雰囲気、近寄りたくもある。しかし見学ツアーに申し込めば、建物の中はもちろん地下金庫の内部まで見られるとい

う。ぜひ見たいと思い、参加してみた。

まず集合場所へ向かうため中庭へ。正面玄関だが、コの字形の建物の正面が壁で塞がれているため、中庭になっている。かつては左右二つの門から荷馬車が出入りしていたと



辰野金吾博士の代表作とされる日本銀行本館の中庭。エントランスの堅牢な柱が、威風堂々とした印象を演出している(右頁)。明治15年の開業から125年。歴代総裁の肖像画がずらりと並び、歴史の重みを感じさせる通称「松の廊下」(上)。明治時代に英国から輸入された鉄製製の階段(左)。

いう。馬のための水飲み場が今もある。獅子の口から出た水が下の受け皿に落ちるようになっていたが、昔とは水圧が違うのか、今は慎重に栓を開かないと勢い余って広場のほうまで噴き出してしまふという。

ツアーでは、最初に視聴覚室で日銀についての紹介ビデオを鑑賞。ついで館内を案内されるが、その前に金属探知機のゲートをくぐってセキュリティチェック。いかにも大層なところに入る感じがして、わくわくする。

明治二十一年、日本銀行の設計者に決まった辰野金吾は、欧米への調査旅行に出発し、やがてモデルとするにふさわしい銀行をみつけた。ベ

ルギー中央銀行である。東秀紀氏は『東京駅の建築家 辰野金吾伝』(講談社)で、その設計者アンリ・ペイヤールに、戦乱続くヨーロッパにあつて独仏にはさまれた小国であるベルギーの中央銀行は要塞のごとき防御性を持つ必要があるのだと説明させている。辰野はその国情を日本に共通するものと考え、ペイヤールをアドバイザーに迎えて、設計にとりかかった。近代国家たる威厳を示す記念碑性と防御性とを併せ持った建築として、ドームの聳える建物は、城塞のごとく五連の銃眼にも見える小窓をうがつた壁を正面に備え、小さいながら空堀までも巡らされた。ただし正面の壁は欧米の銀行には類例がないものだそう、東氏は「むしろ日本の武家屋敷に近いもの」と記している。建築様式としてはルネサンス様式を加味したネオバロック様式とされるが、装飾性を抑え質実剛健に徹したところにも武家的な感性が生きているのかもしれない。

次に二階へ上がる。階段は英国から輸入されたという鉄製で、段差が小さく昇降しやすい。幾度かの改修を経て、今もなお立派に役目を果た

している。手すりは花柄ながら、すっきりとした簡素な印象が小気味いい。

一方エレベーターは、昭和七年に設置されたものだが、明治二十九年の建築当初に備えられていた水圧式エレベーターのデザインを踏襲しているといい、エレベーターが先端的で豪華なものだった時代の雰囲気を感じられる。

二階の赤絨毯じゅうたんの敷かれた通称「松の廊下」には、初代から二六代までの総裁の肖像画が並んでいる。藤島武二や小磯良平といった著名な画家の作もあり、じっくり見れば、それぞれの総裁や画家の個性が楽しめる。たとえば一六代の澁澤敬三は空襲の焼け跡を背景に立っている。野外を背景とした肖像はこれのみで、澁澤が強いてそうさせたのだという説もある。その思いを想像すると感慨深い。

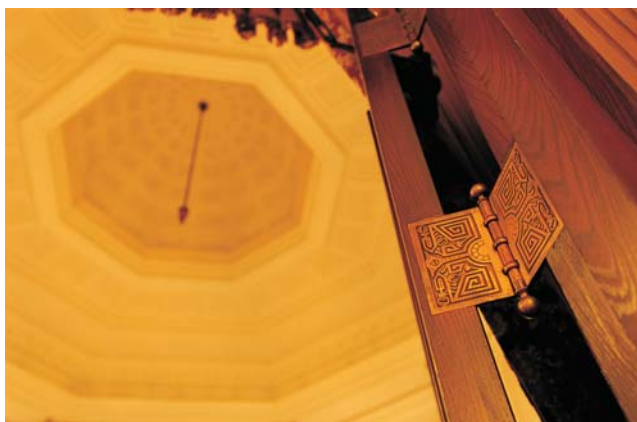
歴代のうち最も有名な人物は七代の高橋は清だろう。大蔵大臣や総理大臣となる以前、日銀の副総裁を二年三カ月、総裁を一年八カ月務めた。また辰野金吾の師であり、本館の建築とも深く関わっている。

高橋はかつて大学南校（東京帝大の前身）の教師だったが、芸妓との関係を問題とされ免職になり、肥前唐津藩の洋学校の英語教師となった。辰野はその生徒だった。廃藩置県によって洋学校が閉校になると、高橋は東京に戻り、辰野ら洋学校の生徒たちも後を慕って上京、辰野は新設された工部省工学寮に入学し、建築を専攻する。高橋との出会いがなければ、建築家になることはなかったにちがいない。調査旅行から帰った辰野が日銀の建築にとりかかった頃、高橋はペルーの銀山開発に失敗して信用を失い浪々の身となっていた。その高橋を知人に紹介された当時の総裁、川田小一郎は、鉄道会社の社長ポストに推薦すると申し出たが、高橋は、経営者として自分は失格なので丁稚奉公からやり直したいと主張した。感動した川田は日銀に招き入れ、高橋は建築所の事務主任となる。以前の教え子の辰野の部下となったわけだが、在庫管理の合理化などの大胆な改革を次々と実現し、工事が抱えていた諸問題を解決していった。そうしていなければ工事はかなり難航していたにちが

カウンターと窓が当時の面影を残す旧営業場。柱は辰野博士が自らデザインしたブロンズのレリーフで装飾され、壁には繊細な彫刻が施され、当時の職人の腕の良さが光る（右）。史料展示室のドアのまるで美術品のような蝶番。細やかな神経が建物の隅々にまで行き渡っている下。

いない。辰野と高橋との重なる奇遇が、この建築を実現させたのだ。また、この実績が評価されて高橋は西部支店長に転ぜられ、やがて総裁ともなるのである。

廊下を渡り、ドームの下にある八角形の部屋「八角室」に入る。史料展示室となっており、金を量る大きな天秤、昭和四十四年まで始業・終







平成十六年まで一〇〇年以上使われていた金庫。拡張を重ね、中央部まで合計三つの扉がある(右)。ドーム屋根のちようど真下に位置し、八角形の形をしている地下金庫中央部分。天井のレンガは力を分散するために、アーチ状に積まれている(左)。

業を報せるのに用いられた拍子木、「駆け付け人夫」と呼ばれた消防団員の法被や提灯などが並ぶ。きっと火事はなにより警戒されたことだっただろう。

関東大震災のとき、本館は激震には耐えたが、翌日未明に猛烈な火災が迫り、炎が本館三階の明かり取り窓から侵入してしまった。後に一三代総裁となる深井英五理事は消防署へおもむき、すでに疲労困憊<sup>こんぱい</sup>していた消防士に、日銀の営業が停止した場合の影響を説明し、出動を懇請した。それに応えた消防士たちの渾身の活動により、三階は全焼したもの、一、二階は一部を焼いただけですんだ。本館のただ一度の受難である。震災後、内部は改修されたが、中庭に面した外壁のところどころに染みなど当時の消火活動の痕跡を見ることが出来る。

一階に下りて、三階まで吹き抜けになった旧営業場に入る。真っ白な広い空間には繊細な美しさがある。この建物は、外観は砦<sup>やしろ</sup>のようでも、中を歩いていると、隅々まで配慮を尽くされた繊細さが感じられる。たとえばドアの蝶番<sup>ちょうばん</sup>の美しさはどうだ

## INFORMATION 日本銀行本店見学

### ●見学内容

日本銀行本館や地下金庫等の見学案内(無料)

住所: 東京都中央区日本橋本石町2-1-1

見学日: 月～金(除く祝日、12月29日～1月4日)

### ●見学時間

所要時間: 約1時間(日本銀行紹介ビデオ上映約18分、店内見学 約40分)

原則として平日の

①9:45～ ②11:00～ ③13:30～ ④15:00～

対象: 原則中学生以上、人数制限あり

### ●申込方法

事前予約制(申込みは、希望日の3カ月～1週間前まで)

申込先: 日本銀行情報サービス局広聴担当(見学担当あて) 予約受付直通: 03-3277-2815(予約受付は平日9:30～17:00)

詳しくはホームページを

<http://www.boj.or.jp/type/etc/service/annai03.htm>

### ●その他

英語案内もあり(要相談)

ホームページでは「バーチャル見学ツアー」を実施

<http://www.boj.or.jp/tour/index.htm>

ろ。辰野は一年間の欧米での調査旅行を終えて帰国する際、基本計画をまとめた図面を亜鉛鉄板製の円筒に密封して持ち帰った。もし難破しても、人はどうなれ、筒だけはどこかに漂着するだろうと期待してのこと、実際、別便で送った建築書は衝突事故で船が沈み失われてしまったという。辰野の覚悟と周到な配慮を思い知らされるエピソードである。建物にもその両方が表れているのだろう。

中行事とされたという。辰野にとつて生涯最大の欣快事<sup>きんかい</sup>だったのだろう。見学者に一番人気があるという地下金庫は、平成十六年まで使われていたもので、扉は分厚いというより大きな塊のよう。昭和七年に金庫を拡張したときに設置されたものという。さらに建築時に設置された旧金庫扉を通り、奥へ。中では、閉ざされた静けさは感じるものの、金庫内にいるという気はしない。化粧レンガの壁や天井、一四二六㎡もあるという空間が、当方の金庫というイメージと違いすぎるせいだろうか。この非日常的な空間を味わったら、見学ツアーは終わりのとなる。